

---

# カマイタチ

花泉カヲル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カマイタチ

### 【Nコード】

N3563C

### 【作者名】

花泉カヲル

### 【あらすじ】

同じ美大に通う友人加奈子は、幽霊が見える私を面白がって、意外な行動に出るのだが・・・。

## ACT 1・残像(前書き)

三部作の一作目です。三回で終了します。

## ACT 1・残像

一瞬。

されど一瞬。

秘められた悲しみと苦しみが、わたしの意識をかすめるとき、それはわたしの記憶に楔となって打ち込まれていく。

「誰なんやそれは？ごつつう可愛い子やんか」

私のスケッチブックを覗き込みながら、加奈子が顔を顰める。

「通りすがりに見た子」

「男だっつーても、あんたの趣味ちゃうな。」

私は苦笑いしてスケッチを閉じた。

べつに彼氏にしたいくて描いたわけじゃない。脳裏に焼き付いて離れない残像を移動するかのよう描いたまでのこと。だいち、気に入ったところでどうにもならない。

「そいつをどこ見たんや？」

「三池」

「警察に通報せんでええのん？」

「なんていうのよ？」あそこに人が沈んでいます。ええ見たんです。

幽霊を……『つて？』

「そつや」

わたしは、真顔でいう加奈子にがっくりと肩を落した。

加奈子という女には常識は通用しないとわかっていたが。

ふと、加奈子のスケッチが目に留まり、わたしは思わず目をそらした。

そこには、わたしが喉から手が出るほど欲している輝きがあった。

それに気付く自分に苛立ち、無言で画材をしまつと教室を出た。

加奈子はすでに次の美術展の為の作品に取りかかっている。高校2年の時初めて出した美術展で入選した加奈子は、大学2年の今、すでに画家としての名声を巷にまで響かせていた。

同じように入選したものの、たいした評価ももらえなかったわたしとは雲泥の差がある。

誰でも精進すればある程度の技術は取得できる。しかし、輝きは天賦の才のもたらすものだ。

それは、人の心に深く楔を打ち込むように残る“輝き”なのである。

「卒業したら画家になるの？」

そんな、久しぶりに届いた友人の、メールへの返信をまだだしてない。どこかで諦らめきれない自分がいるのだ。

「そのスケッチ、よう見せてくれへん？」

気が付くと傍らに加奈子が立っていた。

「どこかで見たような気がするんや」スケッチを渡すと加奈子がそういった。

微かな輝きが瞳に宿る。

「探したりしないで」

わたしは釘をさした。

しかし加奈子は譲らなかつた。

「あんたは手え引いたんやろ？これはすでにうちのもんや。良心の

呵責もみんな、うちが引き受けてやるから」

わたしは開いた口がふさがらなかった。

加奈子は何をする気なのだろうか？

足早に去っていく後ろ姿を、わたしはただ不安なまま見送った。

つづく

## ACT 2

加奈子の行動は、すべてが衝動に支配されている。

美術展で初めて加奈子の作品を目にしたわたしがしたことは、まず、加奈子をぶん殴るというものだった。

「このばか女！」

加奈子の描いた絵は、三池という池にたたずむ少年の絵であった。青ざめた顔は苦悶の表情を浮かべ、カッと見開かれた瞳は、まっすぐにこちらを見ている。

うつすらと開かれた少年の口が、今にも悲鳴を吐きそうである。

わたしは背筋が寒くなるのを感じ目をそらした。

あの少年だ。

わたしが通りすがりに見たあの幽霊

彼の苦しみの感覚が、わたしの中に流れ込んで染み渡った、あの瞬間を思いだし、わたしはその場に座り込んだ。

吐き気がする。

加奈子は頬をさすりながらいう。

「あのままにしてはおけへんやろ」

「正義感？」

わたしは嘲笑った。

「なんでいつも目をそらすんや？それじゃあなんも見えてないんと

「緒やる？」

なにも見ていないといわれ、わたしは激しい怒りに刈られた。

「見たくてみてるんじゃないわ！」

わたしは怒鳴ると立ち上がり、足早に美術館を出た。

そして巷でこの絵が噂になった。

若き画家、火川加奈子の新作「悔」

発端は、美術展を見に来た人々の一言であった。

「これは、以前、行方不明者となった少年ではないか？」

あるとき、テレビのインタビューでキャスターが加奈子に聞いた。

「あれは行方不明の少年に似てるとの噂がありますよねえ？そんなんですか？」

加奈子は頷き、いった。

「ちよつと知り合いだったんや。あの子。よくは知らないけど、あれは彼の好きだった場所」

わたしはちよつど別の番組をみていて、そのインタビューは見なかった。

しかし、少年の家族は見ていた。

彼らは絵のことを知っていた。インタビューをみたのはそのせい  
かはしらないが、とにかく見ていた。

両親は、少年の行きそうな場所はくまなく探したはずだったが、  
自分たちがまだ探していない場所があったことを知ったのである。

だれにでも秘密にしているお気に入りの場所がある。死を望んだ



者が秘密の場所を選んだとして何の不思議があるのか。

あの絵は、彼の両親にとって、自分たちの知らなかった子供の秘密に等しかったのである。

そして、彼らは、あの池の搜索を警察に要請した。

そんなばかげた話しというかも知れない。しかし、わらをも掴みたい人間というものは、微かな希望にでもすがり付こうとするものだ。

警察が渋る中、行方不明者であった彼の家族は、自費で搜索隊を組織し、三池をさらったのである。

そして、彼は見つかった。

池の底で。

### ACT 3

『卒業後は都内の画廊で働くことにしたわ』  
友達への返信にそう書き込むと、返信ボタンを押す前にわたしは考えた。

断ち切れるだろうか？

描きたいという欲求も。

「画廊？」

加奈子が横からパソコン画面を覗いて顔をしかめた。

「絵かかへんの？」

「売るようなものは描けないからね」

すると加奈子は真顔でいった。

「人がなんと言おうと、うちはあんたの絵好きや。でとったら買う」

わたしは笑った。

「高いわよ」

「もちろん値切る」

加奈子はそういつてわたしにウィンクして見せた。

お気に入りの教授を見つけて走っていく加奈子の後ろ姿をみながら、少し羨ましく感じる。

才能にかまけている加奈子ではない。

努力をおこたらない姿勢と、それを感じさせないバイタリティも

ちゃんとあるのだ。

才能がなくても、はなからかなわなかったのだ。

ふと、あの三池で見た少年はどうなっただろうと考えた。

遺体が遺族の元へ返ったからといって幽霊が現れなくなるというのは希である。

なぜかはわからないが。

未練というものかもしれない。

あるいは残像。

幽霊という名の。

わたしの中の恐怖は、彼をまた見るのではという恐怖ではない。

いつか　　またどこかで彼のような幽霊を見てしまうのではという恐怖だ。

それはこれからもずっと、癒えない傷のように付きまとうのだらう。

そしてわたしは脅え続ける。

真実を見るという恐怖に。

<おわり>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3563c/>

---

カマイタチ

2010年10月17日04時19分発行